シリーズ 第16回

日上山城と小瀬甫庵③

―小瀬甫庵の記録―

小瀬中務正秀正と『太閤記』の著者である小瀬甫庵が同一人物であると書かれた最初の記録は、関ヶ原の戦いから一七四年後の安永三年（一七七四）に刊行された『備前軍記』という書物です。備前軍記は現在の岡山県域を中心とした戦国時代の様子を物語にした、今でいう歴史小説ですので、脚色された部分などもあり、史実に忠実でない部分もあります。また、江戸時代後期～末頃に書かれたと思われる『美作古城記』にも同一人物であることが書かれています。

しかし、小瀬甫庵という人物の晩年は、加賀（石川県）の前田家に仕え、金沢で亡くなっており、その子孫は現在でも続いています。金沢には小瀬家の由緒書もあり、これら金沢に残る史料によると、甫庵は尾張国（愛知県）春日井郡の出身で、初め織田信長の家臣・池田恒興に仕え、小牧・長久手の戦い（一五八四年）で恒興が戦死した後は、豊臣秀吉の甥・秀次に五〇〇石で仕えています。秀次が自害した（一五九五年）後は京都で浪人し、後に秀次の宿老であった堀尾吉晴に仕えます。堀尾家は関ヶ原の戦い（一六〇〇年）の恩賞で、出雲・隠岐（島根県）二十四万石の領地を与えられ、松江に城下町を建設する時には松江城の縄張りや町割りの設計を甫庵が行ったといいます。吉晴の死後は再び浪人し、旧主で当時播州姫路藩主であった池田家に客分としてしばらく滞在した後、三度浪人し、京都に住みました。

松江城（島根県松江市）

甫庵には実子がいたのですが、坂井家に養子に行き坂井就安と名乗り、父甫庵と共に堀尾家を辞した後は加賀の前田家に仕え、治水工事や城下町の建設に功績がありました。寛永元年（一六二四）、甫庵は息子・就安の推薦もあって前田家に二五〇石で仕え、翌年『太閤記』を著します。そして寛永十七年（一六四〇）七十七歳で亡くなります。晩年甫庵は養子を迎え小瀬家を継がせ、子孫は代々前田家に仕えますが、甫庵から数えて七代後、天明四年（一七八四）に不祥事で流刑となり断絶してしまいます。しかし実子・坂井就安の家系は続き、就安から三代後に「小瀬」に改姓し、小瀬良知の代に明治維新を迎えます。

以上が由緒書等に伝わる小瀬家とその子孫の履歴です。このことを裏付ける史料として、慶長元年（一五九六）に、甫庵が刊行した著書には京都西洞院通りに住んでいたことが書かれています。これは豊臣秀次死後に浪人していた頃と思われますし、堀尾家家臣時代には出雲の仁多郡の郡代に任ぜられ、慶長六～九年（一六〇一～〇四）に書かれた寺院への寄進状等、甫庵の署名のある書状も数通残されています。この頃は、先月号で述べたとおり、小瀬中務正秀正は宇喜多秀家に仕えていたことが史料でも明らかですので、二人を同一人物と解釈するには無理があるように思われます。

しかし、秀正や甫庵が亡くなってから百数十年を経て、二人を同一人物とする説が現われたのは、この当時にそれを裏付ける何らかの史料が存在したのか、それとも『備前軍記』作者の脚色なのか、今となっては知る由もありませんが、将来どちらかを決定づける明確な史料が発見されることを願いたいものです。

小瀬甫庵一族の墓（石川県金沢市）

参考資料：『備前軍記』・『美作古城記』・『松江市歴史叢書2』・『堀尾吉晴と忠氏』・『北陸医史』・『加賀藩史料』・『鏡野町史』通史編ほか

お問い合せ先
生涯学習課　日下
電話（0868）54-7733

〒708-0421 岡山県苫田郡鏡野町井坂495 鏡野町情報広報課 TEL0868-52-2212
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/